MITSUMORI

三森コーポレーション

2021 春号

012

キラリ✨この1台

■報告者：伊藤　貴寛　　■車名：メルセデス　500E&E500

みつもり物語

ホスト：営業課 飯田
リプレイスマフラー

Shall we take a break?

自動車はどこから来たの?クルマの起源を知ろう!

写真のモデルは、左：松岡（総務）／真ん中：芦立（総務）／右：坂口（営業）

Mitsumori's Staff 中古部品マイスター

三森コーポレーションが誇る中古部品に関する プロフェッショナルスタッフをご紹介いたします

吉田　夏海　NATSUMI YOSHIDA

主な業務：販売フロント
座右の銘：戦いとは常に2手3手先を読んで行うものだ。
勤 続 年：4か月

入社のきっかけ・会社の印象：
前職は2級整備資格を取得後バイク用品店で整備士をしておりましたが、体を痛めてしまい続けるのが難しくなったので転職を決意しました。以前から四輪の仕事にも関わりたいと考えていたため、自動車関係の求人を探していたところ、三森コーポレーションの求人を見つけ、直感でここだ！と思い応募しました。

趣味・特技・ハマっている事など：
編み物をしたり、切り絵をしたり、気の赴くままに車やバイクで出かけたり、趣味が多すぎて体が足りません（笑）。目的地を設けず、適当にバイクや車を走らせるのが好きです。（最後は必ず道に迷ってナビを頼りますが…）

休日の過ごしかた：
晴れた日はバイクです！あまり遠くには行きませんが、ちょっとしたショッピングや冒険はバイクで行きます。時々、実家に帰り、父や弟とツーリングに出かけたりします。ドライブも好きなので、コンビニでお供のおやつを買い、妖怪を探しに岩手へ出かけたり、夜な夜な泉ヶ岳に行き、星空を眺めたりします。天候が微妙な日は家にこもって趣味に没頭しています。切り絵をしたり、編み物をしたりゲームをしたり様々です。最近はプラモデルもしています。下手なのに凝り性なので、なかなか完成しません(笑)。メタリックカラーの筆塗は難しいです。

仕事で気をつけている事：
型式や車体番号など間違えてお伺いしないよう、必ず復唱するよう心がけています。また、電話を取る際は元気に明るく、電話口でも笑顔が伝わるような対応を心がけております。

愛車と選んだ理由、気に入っている点：
最近、スイフトスポーツを購入しました!試乗したら想像より楽しかったのとターボで6速マニュアルという乗りたい車の条件にぴったりだったので購入しました！以前はインテグラのDC5に乗っていました。学生の頃にマニュアルで安い乗用車がいい！という理由で購入しました。なので、初めてDC5を見たときは、こんな特徴的な車あったんだ、くらいの認識でした。乗ってみると、燃費も良いですし、シートも座り心地がよくて、長距離がとても楽で最高の車です。今は弟に譲ったので、乗りたいときに乗れるので手放した、という感じはしません（笑）。
バイクは社会人になりたての頃、GSX250Rを購入しました。登場したころから乗りたかったバイクです。初のインジェクションのバイクですがキャブのセッティングに悩まなくていいので気に入っています(笑)。エンジンが天候に左右されずかかりやすいのもいいですね!スポーツルックなのに姿勢が楽なのもお気に入りです。そのあとにグロムも増車しました。どこにでも行ける小回りの良さと燃費の良さが気に入っています。過去にはRGV250Γに乗っていました。直すところが多すぎてここ数年は不動です(涙)。パワーバンドに入るあたりでかぶり気味になるので、セッティングなどで詳しい方がいらっしゃったら教えて頂きたいです!

お客様へ：
お客様のご希望する商品を一点、一点丁寧にお探しいたします。まずは、お気軽にお問合せください！
自動車の業界は初めてでわからないことがたくさんありますが、日々精進してまいりますので、よろしくお願いします。

Mitsumori Corporation
株式会社三森コーポレーション
〒983-0821 宮城県仙台市宮城野区岩切3丁目2番24号
部品のお問合せは：TEL 022-255-6564　FAX 022-396-1008
URL　http://www.3mori.co.jp

キラリ この1台

前回から始まった新コーナー『キラリ☆この1台』の第2弾です。憧れの1台や、自分が乗っていた1台について、その魅力を詳しくご紹介するマニア必見!?の内容です!

■報告者：伊藤貴寛　■車名：メルセデス　500E&E500　■型式：124036

この車の魅力や思い出

今回は伊藤が担当します。第1弾同様に平成1ケタの車、それはメルセデスベンツの500E&E500です。憧れの1台で思い続けて早20数年、もはやクラシックカーの領域?の、この車の魅力とエピソードをお伝え致します。

バブル崩壊するかしない頃の1991年に販売されたこの車は、既に販売されていたベンツSLのエンジンと足回りをミディアムクラスのボディに載せたスポーツセダンです。SLの部品を共用する為にボディはワイド化、バルクヘッド、センタートンネルは専用に造り替えられ、4人乗りに変更するという部品流用の域では済まないような仕様に変更されています。当時の新車価格1550万円です(もう価格がバブルしています!)同じエンジンを搭載した上位グレード500SEが1400万円、500SLが1380万円、同クラス300Eで600万円でしたので500Eの値段は当時衝撃的でした!さらに開発、製造はポルシェ社と共同で行ったと言うんだからスゴい車なんですね。ちなみにポルシェと共に製造していたのは92年まで。マイナーチェンジ後は名称をE500に変更しそれ以降は自社製造となり、日本では94年まで販売されていました。

そんな肩書きを持ったクルマなので、需要が多かったのか94年、95年と並行輸入車が多く日本に入ってきたようです。95年ファイナルモデルE500リミテッドは全世界500台の限定販売ながら、世界中のどこよりも日本に一番多く輸入されたんじゃないかと思います。最終的に生産台数約11000台で終了し、次期モデルのW210にバトンタッチとなります。もっと詳しく知りたい方は特集や専門紙が出ていました(過去形)のでそちらを探してご確認ください。(以後文中500Eで統一)

さて私、伊藤が初めてこの車に出会った時のお話をさせていただきます。それは販売終了から2年後のことです。私は土木建築系会社に就職していました。場所は東京で会社が新橋にあったこともあり上司に連れていかれて飲み会もしばしば。そんな飲み会で外堀通りから銀座8丁目を歩いていた時、ブルーブラックのボディが街灯に照らされた500Eが停まっていました。下請け会社の社長さんが280Eを所有していたのでベンツのミディアムクラスとは理解していましたが「何かが違うな〜??」とよく見てみると、4枚ドアのセダンにフレアしたフェンダー、55の扁平タイヤにちょっとフロント下がりの車高とセダン離れした出で立ちに目がとまりました。トランクのエンブレムをみると500E・・って5リッターのエンジン?なんだこの車は?なんかステキ!これがこの車との出会いになりました。そこから500Eにハマっていく訳です。当時ネット回線は出始めたばかりでPCもあるわけでなく、もっぱら本屋で「くるまにあ」を買って読み漁って情報収集。欲しいけど中古車でも軒並み1000万円超え。ペーペーの私には到底無理な金額。出来るとすれば外で500Eを見かけては観察するくらいでした。年数を追うごとに雑誌ではその稀有さに特集が組まれ専門誌も発行され中古車は値を下げる事無く流通していました。その人気ぶりにボンネットは決して開けてはいけない外観だけ500E仕様や、5人乗りの500E仕様の、なんちゃってバージョンもチラホラ出始めていました。

高嶺の花は憧れのまま月日は流れて前職からこの会社でお世話になりスッカリ熱が冷め、忘れかけていた2008年頃、以外と近くに500Eの存在を知る事になります。昔から知る中古タイヤ屋の常連さんが500Eに乗っていたんです! 秋、春とタイヤ交換シーズンの多忙な時は、自分の車のタイヤ交換がてら手伝いをしていた時、その常連さんがタイヤ交換の為やってきました。久しぶりに見る500Eは普段使いで艶こそないがあのフレアしたフェンダー、どっしりした存在感は健在で、一気に冷めていた熱量が復活し、中古タイヤ屋のSさんを通し、常連さんに『乗り換えの際は一声掛けて』とお願いしてもらいました。いつになるか分からないけどオーナーとなるチャンスができた! 車両代等クリアしないといけないのも楽しみの一つ、と都合よく考えていたのですが・・・ それから1、2年経ったある日、Sさんから「ベンツの件だけど・・」と話を切り出され、「ついにこの日がやってキター!!」頭の中は500Eを運転している自分を想像していると、Sさんから「モ・エ・タ」と言われ「萌えた??」、聞き直すとやはり「もえた」と言っているではないですか。改めて話を聞くとどうやら「燃えた」らしく、車両後ろから異音がしたので、ディーラーに持って行ったところ、工場に付いた途端出火し、後ろ半分を焼損したとの事・・。おそらくハブベアリングがダメになり火災になったようだとの事でした。

理解した所で頭の中の500Eはどこへやら、これで購入計画は車と共に燃えて無くなってしまいました。縁が無かったとあきらめようと思っていた矢先、ふたたび500Eが目の前に現れたのです! それは、燃えてしまったあの車が三森コーポレーションに解体車として入庫してきたのでした。 燃えた車両を見るのもなんとも複雑な気持ちでしたが、腐っても燃えても500Eなのでリサイクル部品として生まれ変わってもらいましたよ。1台でも多く残すため部品として活用される事に願いを込めて。だけどフェンダーだけはずっと売れずに残っていたような気がします。世の中的にはブームも去り、もう古くなった500Eは輸出に回っていると聞いています。更にタマ数も減り程度のいい個体は、逆に高く、当時の新車価格帯くらいの高値で販売されているようですね。

【最後に】

不思議とこの車とは縁があるような気がするんです。想いは伝わるって聞いた事ありますよね。20数年500Eを想ってるせいか、2年前まで町内にシルバーの500Eがいたり、また自宅から400m程離れている所にブルーブラックのオーナーさんが最近引っ越してきました。現存台数は不明ですが、数台が近所にいるというのは何かのご縁?消えそうで消えないクスぶった熱量が再燃しそうなのは家族には内緒です。(車両価格を見ると消えかかりますw)

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

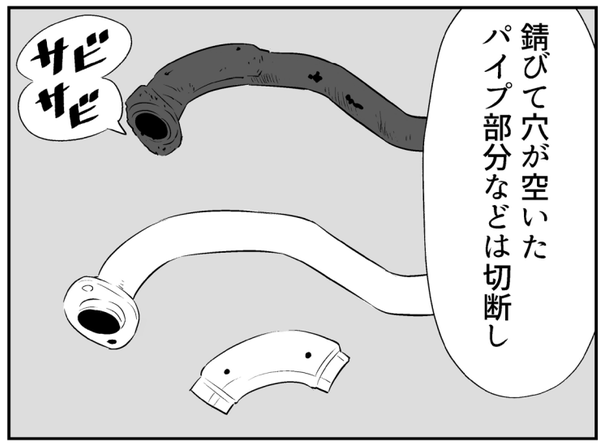
写真は北米仕様なのでヘッドライトが日本仕様とは違います

皆さんこんにちは！
営業課の飯田です
今回は私がご紹介いたします!!

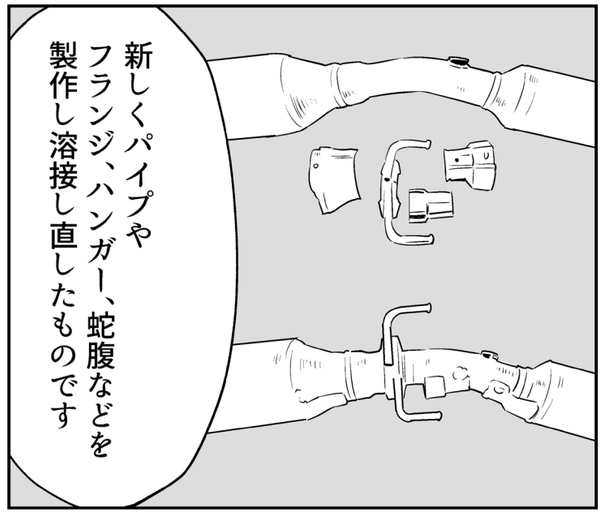
今回ご紹介するのは
『リプレイスマフラー』です

リプレイスマフラー？ってなに？
という方もいらっしゃると思いますので
簡単に説明しますと

マフラーのリビルト品みたいな感じ
と思ってもらえればいいかと思います



錆びて穴が空いた
パイプ部分などは切断し



新しくパイプや
フランジ、ハンガー、蛇腹などを
製作し溶接し直したものです

また、新品マフラーを元に
専用の治具を作る事により
純正品と寸分の狂いのない商品が
出来上がります

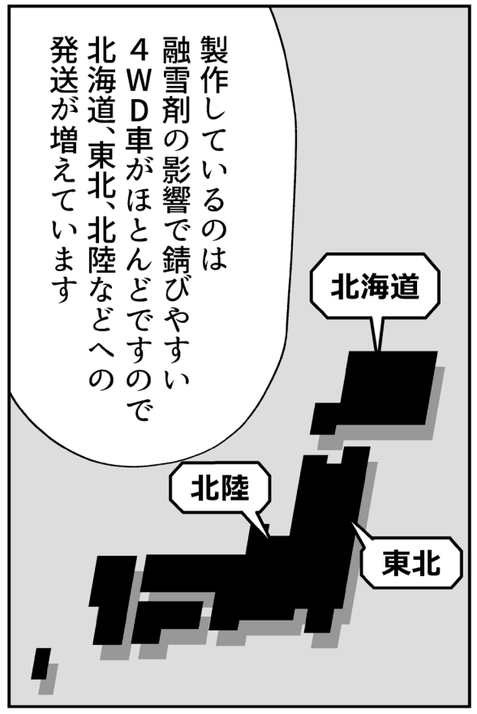
遮熱板やハンガーなども
錆びでボロボロに
なっている事も多いため
部品製作がどんどん増え

今では60種類以上の
部品を独自製作し
車種毎に使い分けています

溶接後は排気漏れチェックや
錆び止め塗装を施し
完成となります

最近ではマークXの
GRX125のマフラーや
プレミオZRT245のセンターマフラーなど
車種がどんどん増えているんですよ

更にマークXのGRX135や
ハイエースKDH206のマフラーも
製作予定です



製作しているのは
融雪剤の影響で錆びやすい
4WD車がほとんどですので
北海道、東北、北陸などへの
発送が増えています

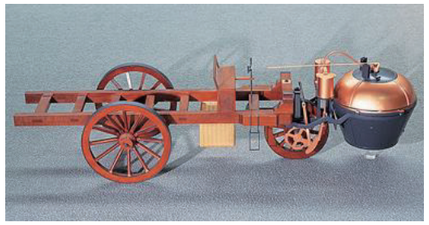
ほっと、ひと息いかがですか?
Shall we take a break?

～3 分で読める休憩コラム～

自動車はどこから来たの?クルマの起源を知ろう!

起源～蒸気自動車の画期的発明～

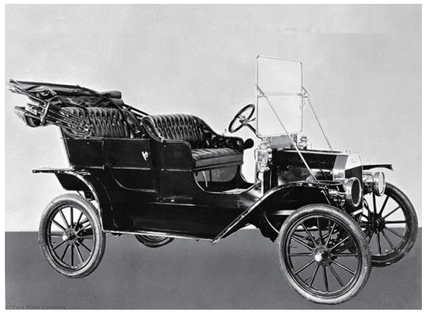
自動車の誕生は1769年、フランスで発明された、蒸気の動力で動く「蒸気三輪自動車」が起源とされています。もとは軍隊の大砲を運ぶように造られたもので、スピードは時速10km以下だったと言われています。日本は江戸時代、ヨーロッパでは馬車が主流でしたので、画期的な発明でした。実は電気自動車も、ガソリン車より歴史は古く、1873年にイギリスで電気式四輪トラックが実用化されています。最近の発明だとばかり思っていたので、びっくりです!



～ガソリン自動車の誕生～

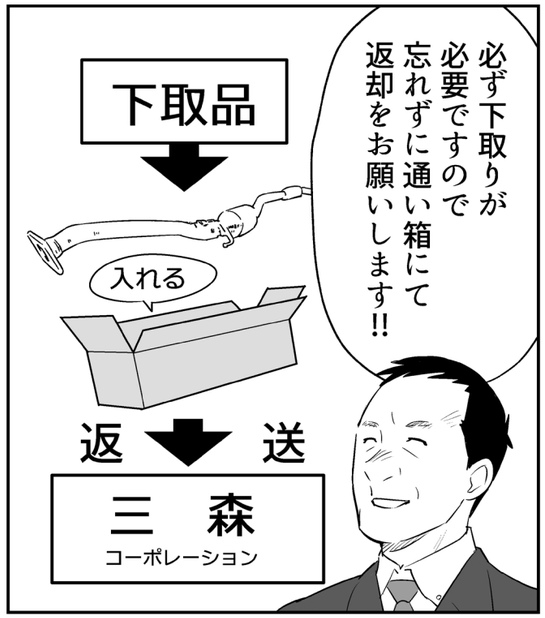
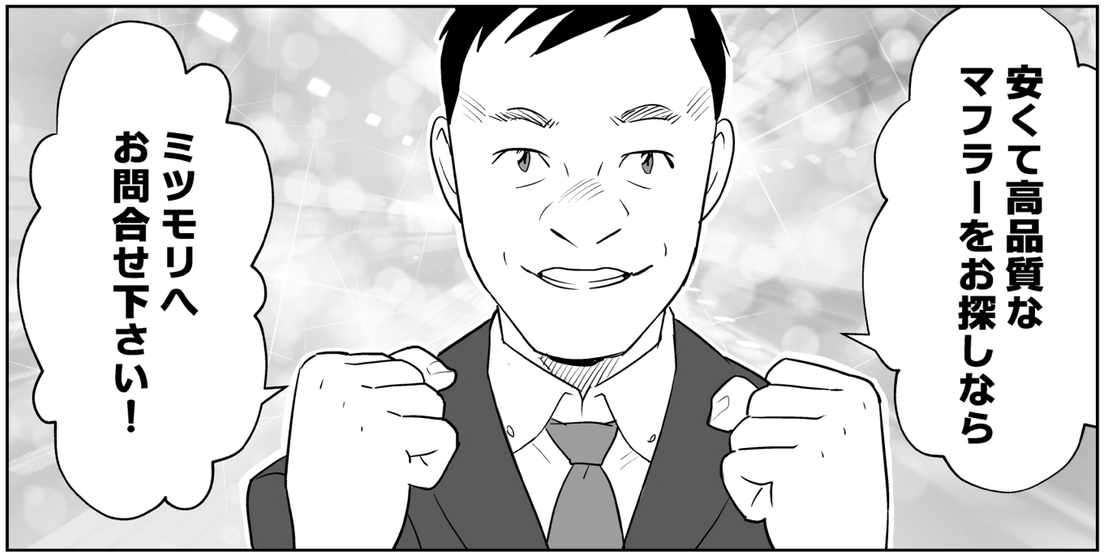
エンジン搭載の自動車は、1870年、オーストラリアの発明家が、ガソリンを燃料にして走る荷車を発明したことに始まります。その後、ドイツの発明家がガソリンエンジンを開発し、同じくドイツの技術者「ゴットリープ・ダイムラー」がそれを改良。会社を立ち上げ、自動車販売を始めました。ドイツでは同時期に、「カール・ベンツ」もガソリン動力の三輪自動車を発明しており、やがてその2人が手を組み「ダイムラー・ベンツ社」が誕生。ガソリン自動車を発明したのは、ダイムラーとベンツと言われています。

世界初の自動車レースもこの頃に開かれており、22台の自動車が出場しました。参加車のうち15台がガソリン自動車、6台が蒸気自動車、1台が電気自動車で、完走したクルマ9台のうち8台がガソリン車であったことから、ガソリン車の優位性が明らかになったレースだったそうです。



～自動車量産の時代～

今の自動車工場のように量産体制を確立したのが、1907年にアメリカの「ヘンリー・フォード社」が量産した「フォード・T型」。フォードは、流れ作業で自動車を大量生産することにより販売価格を下げ、自動車を、富裕層だけでなく一般大衆にも所有可能にし、大きな産業にした立役者でもあります。また、価格だけでなく、操作機能の向上も大衆化に一役買いました。昔は重いクランクハンドルを力いっぱいに回さなければエンジンが始動できず、女性や老人では操作が難しかったのです。男性でもハンドルが逆回転してしまうことがあり、腕の骨折や、死亡事故もあったほどでした。技術者の地道な努力が積み重なり、現代の、誰でも乗れる便利な乗り物に成長していったんですね。当たり前のことが当たり前ではない時代を振り返り、現代のありがたみを実感します!

上記の記事は、自動車業界専門コンサルティング会社
「株式会社カービジネス研究所」様のご協力によりご提供いただいています

カービジネス研究所
Car Business Laboratory